



第 3 号
平成16年12月発行
発行責任者 憲
平 澤

△△報を通しして

△△ 長 平 澤 憲

今年の夏は、から梅雨から始まり猛暑、台風と異常気象の中で、皆様方には、ご健勝にてご活躍のこととお喜び申し上げます。

暑い夏も去り、さわやかな秋の季節を迎えご案内の通り春高会も皆様方のご協力とご支援により八年目の総会、懇親会を十月二十四日の日曜日に開催するはこびとなりました。一年に一回の集ま

りですが、年毎に参加者の顔ぶれも幅広くなり、大学在学中の方も参加され、年代を問わず様々な話題で盛り上がっています。お住まいやお仕事の都合で参加困難な方もあろうと思いますが、幸い事業の一環として会報を通しての参加の方法もあろうかと思えます。

年間を通して、近況など自由な執筆をお受け致しますので事務局ま

春高同窓会△△事務局長

中 村 行 生

貴、春高春高会がこのほど会報第三号を発行されること、そのご努力と熱意に心から敬意を表したいと思えます。春高同窓会には三十を超す春高会(支部)があります、会報を定期的に発行しているのは、春高春高会と宮代春高会のみです。それ

ほど会報発行というのは、ご苦労の多い大変な仕事であると思えます。

さて、五年前の母校の創立百周年記念を契機に、県内の各市町を中心に、北海道から横浜、大阪まで、三十を超す春高会・支部組織が今それぞれ独自の活動を展開し

ております。この春高会・支部の活動が、同窓会活動の基盤をなすものと思えます。現在各地で自治体の合併への動きが進んでおりますが、春高同窓会としましては、自治体の合併がどのようになろうとも、現在の春高会・支部組織のままでもいいこと、今年度の役員会、総会で決めていただき

ました。組織が大きくなりカバールする範囲が広くなりますと、必然的に人間関係が薄くなってきます。

春高同窓会では、アメリカ、オレゴン州の「ローズバーク市」と十年以上にわたり交流を続けています。昨年は、姉妹都市提携十周年を祝いました。毎年六月頃、春高町からローズバーク市へ、また十月頃にはローズバーク市から春高町へ、それぞれ訪問団が派遣されます。

国際交流

宮同二二二回卒

中 山 登 三 司 田 力

と聞いています。どうぞ今後共、母校との連携のもとに春高春高会の益々の発展を願ひ、皆様方の益々のご活躍、ご発展をお祈り申し上げます。

紙をお送りしてきました方々の、まだ、七・七パーセントという数字でございます。今後も引き続き、春高グッズ購入のご協力と併せまして、賛助金へのご協力をぜひお願い申し上げます。

さらに、それぞれの市町の中学生の訪問団も一年おきに訪問します。そして、全員がホームステイを体験します。私も、五年前に引き続き、今年二度目の訪問をしてきました。今では、市民町民同士個人的にお付き合いしている人もたくさんいます。

ところで、これとは別に、昨年

ドイツの「ターラント」という町を、十数人の町民のみなさんと訪問してきました。そこは、百年位前、葛蒲町の名誉町民である「本多静六博士」が留学した町です。ここでも歓迎を受けました。国際化時代を迎え、葛蒲町が世界の国々と交流を深められることは、ありがたいことです。

五十五歳の初体験

第二十一回卒業 平沢 栄蔵

今年二月義父が亡くなった。十九歳九ヶ月、あと三ヶ月で百歳を全うするところであった。私も幸か不幸か病氣らしい病氣をしたこともなくあと三ヶ月で五十五歳を迎えようとしていた。ところが、今年二月喉が痛くて食事も飲み物も通らなくなった。

当時、娘はイギリスに留学しており交通事故に遭っていた。イギリスでは満足な治療も受けられないうらいしく、帰国するという。成田まで妻と迎えに行くため休暇を取っていたが、喉が痛くて娘の迎えどころではなく私は病院に行き妻一人で成田へ迎えにやった。妻も風邪気味で体調を崩していた。そのころ義父の具合も芳しくな

った。私は病院へ行き症状をお話しし診察を受けた。

扁桃周囲炎、即入院しなさいとの診断であった。「ちょっと待って下さい。明日また来ますから、とりあえず今日は帰してください」と即入院を断り点滴を受けて帰宅した。まず点滴が初体験であった。一リットル位の点滴であったのだらうか、一時間半かかった。イライラした。点滴は即効性があるのかと思っていたが、全く喉の痛みは立ち去ってくれない。生唾も飲み込めない喉の痛みと、空腹感、脱水感に一晚苦しんだ。

娘は、妻と共に帰ってきた。足を打ったらしく引き摺るようにしていた。痛々しい。私は喉が痛い。

妻は風邪で体調が悪い。義父は肺炎を拗らせているらしい。そんな状況下、翌日私は病院に向かった。即、入院となった。入院の手続きもそこそこに、入院後の診察・・・

ドピュー・・・その後、三日三晩点滴のみの生活となった。入院初体験、切開初体験・・・悪いときには悪いことが重なるものですね。義父が亡くなりました。私も入院半ばで退院し義父の葬儀には出席しましたが・・・

国際文化交流について

平沢 卓

ローズバグからお出での皆様、

今晩は。会長の平沢 卓です。一言挨拶させていただきます。今宵皆様を迎えます事は、よろこびの至りです。私達は、皆様の御来訪を、お待ちしております。今年の六月に、葛蒲からの訪問団が貴国を

は永く残る事でしょう。皆様に於けますは、この期間中、もみじに包まれた木々の広がる日本の秋をお楽しみ下さい。

訪れた時に市民の皆様から受けた御好意、お骨折りに、この場を借りて感謝の意を表します。この友情と理解の交流は、しっかりと根をおろしたと思えます。昨年は、忘れ難い年でした。私達は貴方方と共に、十周年記念を厳粛に、無事と行いました。私達の思い出

最後に、このホームステイの計画を実施するに当り、熱意ある御協力をして下さいました日米交流会の会員、そして何よりも、ローズバグの皆様を受け入れてくれたホストファミリーの皆様、及び実行委員の方々の心温まる誠意とお骨折りに深く感謝すると共に、更なる御協力をよろしくお願い致します。

(訃報)

第三十一回卒の荻野 勝さんが、七月二日急逝されました。日頃健康で本会はもとより教育界に於ても重責を担い活躍中であり残念でなりません。謹んでご冥福をお祈り致します。

「△口併雑感」 (春高△△とは)

何ら関係ありませんが

第二十八回 昭和五十一年卒

斎藤 藤 武 雄

昨今、何かと合併が盛んである。銀行等の合併に始まり、プロ野球球団の合併も決まった。埼玉県立高校においても再編、統合が行われようとしている。もっとも身近なところで最大の関心事は、市町村の合併である。合併特例法の適用を受けようと、全国的に合併協議が盛んに行われ、来年の春には多くの合併による新市が誕生しようとしている。我が葛蒲町も合併協議を進めているが、今後どのような結果になるか大いに注目して行きたい。

今回の合併で、わたしが思うのは、昔から親しんできた伝統ある名前の合併による消滅であり、ついで寂しさを覚えてしまうのは、何故であろうか。五十年に一度あるかないかの出来事であるが、新しい市の名前がいかにも作ったような味気ない名前が多すぎるような気がする。つい何年前には十九世紀から二十世紀への橋渡しを経験し、また、平成の大合併というこのような変革期にたまたま遭遇している私達の宿命なのであろうか。

「インターハイで勝てるなら

死んでもいい!」

春日部高校

執念のインターハイ初優勝

陸上部 野本順一 (宮岡二七回卒)

戦後旧制中学制度が廃止され高等学校の区分けがなされた。同時にインターミドル(Jrハイスクール)からインターハイ(高校総体)が始まったのである。

春高のインターハイを、そして陸上部を語る上でまず筆頭にあげべき先輩が、後藤 均先輩(高五回)である。後藤 均先輩は、インターハイで我が校戦後初の優

勝者となり、その後の春日部陸上部の隆盛の起源となった。このインターハイ制覇を皮切りに、その後長きに及んで、砲丸投げに「後藤時代」を作った大選手である。さらに我が校の誇る伝説の「後藤兄弟」。長兄の後藤純男さんは、ご存知日本画会の巨匠である。(東京芸術大学・美術学部教授として九年間在籍)末弟の秀夫さんは、陸上部時代二年生でインターハイ三位、三年次は五種競技で高校記録で優勝している。東京五輪の聖火ランナーも勤めあげた。

★長野インターハイへ
昭和二十七年長野県松本市で、第五回高校総体は開催された。我が校陸上部は復活ののろしを上げた。前哨戦の関東インターハイも開催わずか五年目をもって総合初優勝して「全国総合制覇」も狙っていた。後藤 均主将は、関東大会で砲丸・円盤・二〇〇mのチャmpionであり、副業と思われる二〇〇mでは県高校新までマークしてしまった。

★友情の砲丸投げ
盆地特有の過激な蒸し暑さ・選手全体に調子を崩す者が多く(当時おそらく栄養失調状態が多かったはず)、後藤先輩も例外ではなかった。予選通過記録の十二m

三十を越えられずヒヤリとしたが、上位十二名に入り無事通過。しかし、予選通過したはずのリストに名前が無いのに驚いた!審判に進言、それを三重名張高の藤田選手も証言してくれたため、記録員のミスが認められたのであった。起死回生で臨んだ砲丸決勝では、リンクトップの古豪・磐田南(静岡)の選手が振るわずチャンス到来。ミンジャッジを救ってくれた藤田選手と優勝を争い、六cmの僅差で後藤先輩が優勝を飾ったのであった。新聞記事には「ライバルの証言で決勝へ」の見出しが掲載され、それを期に深い友情が生まれ、藤田選手は東京教育大に進学し、後藤先輩とインカレでも競い合い、後のアジア大会まで共に競技する仲になった。

言うまでもないが後藤さんは、インターハイ制覇を皮切りに、インカレ、日本選手権、日本記録のすべてを勝ちとったのだ。そのインターハイから半世紀が過ぎた昨今、先輩と飲む席でお話を聞く機会に恵まれた。その中で特に心に響いた言葉がある。

後藤さんは「私はねえ、インターハイで勝てるなら死んでもいい!そう思って戦ったんだよ。あいつは狂ってる・・・と噂されるくら

「練習に没頭したんだ」と・私の心は痺れた。日本のトップ選手は「天才」であるのは間違いないのだが、超人的精神力、努力があつてこそその結果であると再認識し

た。才覚も常人とはケタが違うのだろうか、「死ぬ気で勝負！」という覚悟すら凡人の私にはとうてい無理である。

疾不必生 徐不必死

宮同四十九回生 口王 健太郎

「はやく走っても、かならずしも生きられるわけではなく、ゆっくり走っても、かならずしも死ぬわけではない」(『晏子春秋』)

十三代靈公、第二十四代荘公、第二十五代景公の三代に仕えた。晏子と同時代の人物に孔子がいるが、晏子の方が三十位年長である。

二五〇〇年以上も溯った中国大陸の春秋時代、釣りで有名な太公望が始祖の齊の国に、二人の名宰相が存在した。一人は、「管鮑の交わり」で知られる管仲。覇者として黄金期を築いた第十五代君主桓公を輔佐した。

表題は、君主への忠義を貫き、死と隣り合わせの脅迫を前にしても屈せず、そこから帰る時、急いで馬を走らせようとした御者に向かって発した晏子の言葉である。ふと英知の宝庫である古代中国に想いを馳せてみた。日本では、まだ縄文時代である。

「白ひかりと春日部宮同校」

新井 和行

第五十五回卒の新井です。一昨年度に春高を卒業しまして、一年間の浪人生活を経て、今年の四月から東京理科大学理工学部機械工に通っています。私は、春高在学

中には応援指導部に入部していましたが。皆さん御存じのあの応援指導部です。幹部になってからは团长をやっておりました。昨年の葦蒲春高会総会では、私がメインを

やらせて頂いて春高校歌を歌いました。春高生であられた皆さんもそうだと思いますが、春高の校歌は世界一だといえます。幾度となく皆と肩を組み歌ってききましたが、これからもそうだと思います。私は、タダ真面目というのではなく、何事にも一生懸命取り組む馬鹿(で)真面目な春高生が大好きです。本当に春高は素晴らしい学校です。

自分と春日部高校との出会いはまさに運命だったのかもしれない。もし春高へ行かなければ今の自分は全く違っていたのですから・・・。

十月二十四日の総会で、平成十六(平成十七年度役員が決まりました。今後ともよろしくお願いいたします。

顧問 中山 登司男

会長 平澤 憲

副会長 平澤 卓

副会長 堀部 和政

副会長 岡安 正一

監事 小山 典宏
監事 平澤 榮蔵
幹事 野本 順一
幹事 黒川 哲也
事務局・会計 齊藤 武雄
事務局・会計 連見 秀夫

編輯 佳木 俊俊 訂記

記録的な暑さの中、ひと月余り自宅で「静養」ならよかったのですが、「療養」の憂き目に遭い、総会やら会報の発行が大幅に遅れてしまい、申し訳ございませんでした。

今では、すっかりよくなり、心配された寒さによる痛みも、現在のところないのです。一安心というところですが。

ケガをして、改めて感じたのですが、日常生活が、何の支障もなく過ごせることのありがたさを実感した次第です。

皆様も健康に留意し、葦蒲春高会の発展のため、今後ともご指導、ご協力をお願いいたします。

(連見)